

吉田祥子

結城雅樹

2020年に起こった、新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的なパンデミックにより、社会状況や人々の生活は大きく変化した。緊急事態宣言が出され、外出自粛期間やオンライン上のやり取りが増加した。内閣府の「満足度・生活の質に関する調査」に関する第4次報告書によれば、若者の過半数の生活満足度が低下した一方で、16.2%は満足度が上昇するという傾向が見られ、個人により生活ストレスの変化が異なることが示唆された。また、2020年10月14日のITmedia NEWSの記事によると、東洋大学の松原聡教授により、オンライン授業を受けた大学生を対象に授業選好が調査された、従来の対面授業よりもオンライン授業を好む者も一定数存在することが示された。つまり、個人により授業選好が異なることが示唆された。このように先行研究では、コロナ禍による生活ストレスの変化や授業選好が個人によって異なることが示唆されてきた。しかし、このような違いが存在する要因には検討されてこなかった。そこで本研究では、コロナ禍による生活ストレスの変化と授業選好の度合いを検討する上で、個人が持つ対人恐怖症・内向性・外向性の3つの性格特性の違いに着目した。北海道大学の2年生以上の学部生を対象に、性格特性と、コロナ禍による生活ストレスの変化および授業選好の心理傾向を測定し、それらの関連を検証した。その結果、ストレスの変化に関しては、対人恐怖症傾向が高い人は低い人と比べて、コロナ禍以前の生活においてより強いストレスを感じていたこと、また、その差はコロナ禍後に小さくなったことが発見された。また、内向性が高い人ほど、コロナ禍以降にあまり高いストレスを感じていないこと、外向性が高い人ほど、コロナ禍以前と比較してコロナ禍以降に高いストレスを感じていることが発見された。一方で、人々は性格特性に関わらず、コロナ禍以前よりもコロナ禍以降に高いストレスを感じていることも発見された。この結果から、性格特性によりコロナ禍による生活ストレスの変化は存在するものの、コロナ禍特有のストレス等により、人々全体の生活ストレスが上昇したことが考えられた。授業選好に関しては、対人恐怖症傾向が高い人ほど、対面授業を好みにくいこと、また、外向性が高い人ほどオンデマンド授業を好みにくく、対面授業を好みやすいということが発見された。この結果から、性格特性により授業選好に違いがあることが考えられた。